

オヒイサマの電子郵便

渋谷 繁樹



くお願ひいたします』で終っている。顔をあわせながら、電話でおしゃべりしながら、電算機で交信しながら、何度、同じ言葉と文面を、聞いたり見たりしたか。大先輩に不肖の後輩は、常に、原稿を催促されていた。

携帯型電算機の電子郵便の保存箱に、ティコサンからの電子郵便が、七十通、残つている。一番新しい日付は、二〇一一年四月二十五日だから、いなくなるほど一週間前の送信になる。時刻は午前七時五分、朝ご飯の前だらう。「二十三日夜はちょっと残念でした」と始まっている。四月二十三日の夜、入来院夫妻は鹿児島で宴会だった。顔を出してと言われていたのだけれど、当方は鹿児島以外の場所で飲ん方だったので、会えなかつた。会う時に会つていないと会えなくなる。最後の電子郵便は「『炉ばたセイ談』よろし

ティコサンは短歌も添えていた。「美女ありて美女なりしかば無残なり死を告ぐ画面のリズの老醜」。短歌大会の出品作品で大会出席者の投票で優劣が決まる。「私の短歌は〇票でした。予測していましたからどうもありません」。要するに、誰も票を入れなかつた作品になる。投票は記名だから自分が入れると手前味噌がばれる。らしいと言えばらしい作品で、率直果敢、修飾無縁、言いたいから言つてなにが悪いのよ、と開き直つている。オヒイサマなのに、オヒイサマだからか、いざ、批判の俎に載せると、鋭利な舌鋒は切り

まくつた。老醜だから老醜なのよ、断定と決断に、躊躇も遠慮も気配りもなにもない。

批判もされているうちが盛りなのかも。

短歌作品の背景の説明も電子郵便には付いている。「フィンランドの昔話にナイナという美女がいて、名前は忘れたけど彼女に惚れ込んだ若い男がいたのですが、年取って醜くなつてからその男を追いまわす、男はひたすら逃げる。結末は忘れたけれど年取った女の執念深さが印象的な話でした。やつぱり年月は無残だと思います」。エリザベス・テイラーを短歌に料理するのに、北欧の物語を素材にするのが、ティコサンの知性の背景であり奥行きでもある。知のきらきら星は、時代も国境も、いとも軽やかに飛び越えていく。話を聞けるうちが、幸せなんだろうに。

原稿の催促文の前置きは「にしき江で講演なさるのですね。私は五月十八日がCT予定

日ですので残念ですがバスとなります」。当方が短歌結社の一つで話をするのを聞かれなくて、胸をなでおろしたのを思い出す。知の塊に後で何と言われるかを想像したら、とてもテイコサンの前で、講演なんかできるわけがない。お聞き逃していただいたのは幸いなんだけれども、CT予定日の字を見ると、切なくなる。ガンをコテンパンにやつづけて、大勝利を確認するための検査だったのに。

最後から一番目の電子郵便の日付と時刻は四月二十二日午前九時半。「昨夜は三木会でした。郵便局長や大工さんたちとの月一の我が家での会費五〇〇円の飲み会。新会員に野間さんがなつて、政界の裏話など楽しかつたです。用意は私がしますが、オジサンはもっぱら片付担当なので今はまだ流しで、焼き肉でこびりついた鉄板と格闘しています」

オヒイサマはキモイリネエチャンの役も

こなしていた。薪能からご近所との寄り合いで、制作総指揮を執っていた。諸般の事務能力に長けていた珍しいオヒイサマだった。

同じ電子郵便の終盤となると、もう、舌を巻くしかない。「ツイッターをはじめたら時間がなくなりました。田中康夫と鳩山がフオロワーになっています。私は、父の昭和寺とまごころ青春短歌大会のPR、それに菅内閣不信任をツイットしています。では、今朝はこれで失礼します」。仕事が電算機の専門家だったにしろ、情報発信の先端に立ち続け、年齢もガンも老醜も制圧して、入来から日本と世界をへイゲイしていたのだけれども。

まだ行つてしまわなくて、よかつたのに。

(南日本新聞記者)

